

A-2-56 プレホスピタルケアにおける呼吸療法の必要性について ～救急隊員への意識調査から～

川崎医科大学附属病院高度救命救急センター

藤尾政子 中野朋美 大濱忍 丸橋民子

救急医学 鈴木幸一郎

【はじめに】

呼吸不全を改善する呼吸療法はプレホスピタルケアにおいて重要であり、救急隊員の協力は救命率のさらなる向上につながると思われる。今回、救急隊員を対象として呼吸療法に関する意識調査を行い、問題点を明らかにし、今後の取り組みについて一考察を加え検討した。

【対象と方法】倉敷市消防局管内の経験年数 1～38 年目の救急救命士を含む救急隊員 60 名（救急救命士 22 名、救急隊員 38 名）を対象に呼吸療法の認識度に対するアンケート調査をおこなった。

【結果】呼吸療法を行ったことのある救急隊員は全体で 67%あり、職種別では救急救命士 95%、救急隊員 48%と差がみられた。呼吸療法を行えなかった理由としては、呼吸療法のやり方がわからない 46%、呼吸不全の搬送例がない 15%、呼吸療法を行うべきか判断に迷う 11.5%などの理由があげられた。次に実際に呼吸療法を行ってきた上で困ったことがあるかどうかの問いに関しては、全体の 61%が知識や技術に関するものであり内容としては、手技に自信がない 39%、救急車が走行中のためやりにくい 14%、酸素投与量がわからない 11%、呼吸療法を行うべきか判断に迷う 5%、患者に苦痛を与えてしまった 3%、と

いう意見がきかれた。

【考察】実際に呼吸療法を行ったことがある救急隊員は多くみられたが、そのほとんどが手技について不安や疑問を抱いていた。実際に呼吸療法の必要性を感じ、形式上はおこなっているにもかかわらず、処置の効果が有効であったか否か、患者に苦痛を与えてしまったのか、優先順位はどうであるのか確認する機会もなく、患者様の訴えと $S p O_2$ 値が手技の指標になっているのは現状であり、それが手技に対する不安や自信を喪失させられる原因の一つではないかと思われる。そのため、救急隊の 95%は呼吸療法に関する勉強や研修会への参加を希望しており、確実な手技を身に着けることを願っている。今後、救急隊の呼吸療法に関する知識を高めるとともに、自信をもって効果的な呼吸療法をプレホスピタルケアで安全に行っていくためには、医療者間と共通認識をもち情報交換を行ってかなければならない。また、勉強会への積極的な呼びかけも必要であり、互いに知識を磨きあい、救命率の向上へつなげていきたい。